XXIV

# 本が語つてくれること
# 言葉といふもの

集英社

吉田健一著作集 第二十四巻
本が語つてくれること　言葉といふもの
昭和五十五年八月二十日　第一刷印刷
昭和五十五年九月四日　第一刷發行
著者＝吉田健一
發行者＝堀内末男
發行所＝株式會社集英社
東京都千代田區一ツ橋二丁目五番地一〇號
電話＝東京（二三〇）六三六一〈文藝出版部〉
東京（二三八）二七八一〈販賣部〉
整版所＝株式會社中臺整版
印刷所＝大文堂印刷株式會社
製本所＝株式會社石橋製本工場
©1980 Nobuko Yoshida, Printed in Japan
0395-171024-3041　落丁本・乱丁本はおとりかへします

# 吉田健一著作集　第二十四卷　目次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

本が語つてくれること　七
時評（昭和四十六年）　三
文藝時評（昭和四十七年）　一三
本を讀む爲に　一三
本が語つてくれること　一三六

言葉といふもの　二一七
言葉といふもの　二四〇
說話　二五五
日本語　二七一
素朴に就て　二九七
讀むことと書くこと

控へ目に　三〇四
無駄を省くこと　三三〇
言ふことがあることに就て　三五六
何も言ふことがないこと　三八二
解題　四〇九

# 本が語ってくれること

# 時評（昭和四十六年）

## 讀書（一月）

大分前から商賣用に讀む本とただ讀む本、或は樂みに讀む本を區別して來た。ただ讀むからつまらない本といふのではないので寧ろこの方がこつちにとつて本といふもの、面倒臭く言へば文學であることは例へばうつかり書評を引き受けてしまつて讀む本も商賣の爲であることで直ぐに明かになる筈である。その樂みに讀むのの中にこの頃は古典などと呼ばれてゐるものが入つてゐるのはこつちが知つたことではない。今の時代は古典も流行に從つて古典だつたりなかつたりするらしい。或は古典かどうか現在の流行を知らないが、讀む本の中には石川淳氏の「夷齋筆談」、「諸國畸人傳」、「西游日錄」がある。又よく讀むものがなくなると戻つて來るのがウォオの小說と菊池貴一郎の「江戶府內繪本風俗往來」であり、ただこの間出て讀んだばかりのものなのでここでは榎本滋民氏の「落語小劇場」（壽滿書店）を取り上げたい。これも何れ幾度も讀み返すことになるものの一つに違ひない。

本を讀むといふのは究極には何かの形でいい氣持になる爲にやることで、これは四書五經からアメリカの探偵小說に至るまで一貫して言へることである。又これは書く方でその積りになつて書くだけではどうにもならないことであつて四書五經の作者達の目的ももつと他の、例へば賢人を育てるといふやうなことにあつたらしい。榎本氏の目的も落語といふ兎に角曾ての全盛時代が去つてこれから地道に一つの確乎たる文學、或は文學と言へないと思ふものが多過ぎるならば口演による民藝の體をなさうとしてゐるものの歷史と技術を後進の爲に究明して置くことにあると思はれるが、それは落語といふものが要するに好きだからでそれでこの一册の本を書くことになつたのであり、氏自身の書く技術が氏を落語の技術に味到させ、或はそれが逆であつても構はなくてこの二つの技術が合して榎本氏の非凡な語り口になつてゐる。又この非凡なといふやうな言葉を使つたことでこれを笑へない落語の本だと思つてはならない。

大ざつぱに言つて悲劇が人を泣かせる劇形式であるならば落語は人を笑はせるのが目的で工夫されたもの、又現に工夫されつつあるものである。その落語を扱つた榎本氏の本も笑ひに溢れてゐてその點でも全く文句の付けやうがない。併しここに文學といふものに共通の作用が生じて榎本氏が自在に落語といふものを分析し、その歷史を案じ、正邪の區別を立てるのを讀んでゐるうちに我々は落語といふ文學の一形式の場合もそれを培つたのである人間一般の世界の思ひに誘はれてここにも人間と人生の領域が擴つてゐるのを見ることになる。勿論それでこその笑ひであるが、それ故にその笑ひは現代人とか知識人とかいふもののひからびた自嘲ではなくて哄笑であり、これは長屋の八五郎とともにすることが出來るものであると同時に我々の書齋で一人で放つことになるものでもある。それは講釋



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

抜きにであつて榎本氏の本を講釋だと思つてはならない。又さう思ふのは無理である。

大分前に故神西清氏がバルザックの「おどけ草紙」に收められた數篇を譯したことがあつた。榎本氏の「落語小劇場」を今度讀んで見て笑ひも自他とともに我を忘れる哄笑になればそこに洋の東西といふ種類の區別も消えることを知つた。そこにある筈の風俗の違ひまで消える所以もこの本は明かにしてゐる。

## 歴史（二月）

前にも商賣用の本がこつちにとつて所謂、座右の書ではないことを書いてそのいつも讀む方の中に石川淳氏のを三册擧げたが、もう少し後に出たものの中に河上徹太郎氏の「有愁日記」（新潮社）がある。それを言ふと今日では差し當りその內容はどういふ性質のもので作者の思想傾向はといふ風なことを書かなければならなくなるのだらうが、さういふことをする氣は全くない。或る特定の內容で思想傾向がどうだから讀むといふのは讀書のうちに入らず、せいぜい精神修養か何かであつて中共では毛澤東語錄がそのやうな形で讀まれてゐるに違ひない。或はせめて「有愁日記」が小說であるかないか知つて置きたい向きがあるならば、これは我々に歴史といふものの正體に改めて、又久し振りに氣付かせてその歴史の前に立つた一箇の人間、從つて無數の人間が陷る狀態を言葉に直したものだといふ說明だけ一應して置く。勿論、小說でさういふことは出來ない。

確かに一册の本は何かに就て書いたものである他ない。併し或る本、或は書と呼ぶに足る一册の本が或ることに就て書いたものであるといふのは字引を引いて或る言葉がかういふ意味だと出てゐるのを見るのに似てゐて、そのことに間違ひはなくてもその言葉が實際にその言葉として用ゐられる時にその字引での意味などは全く問題の序の口であることが明かになる。「有愁日記」では歴史でも何でも或ることに就て語られてゐるのではなくてその語られてゐることがそこにあり、それは作者の肉聲、又息吹きともにそこにある。これが文章といふものであつて、それを書くものが書いて行くに連れて我々人間の世界のことが次々に現前するのに接する魅力が我々を書に赴かせる。從つてさういふ一册の本を紹介するには嚴密には引用する他に方法がなくて、もし紹介するものが自分なりにその本に書いてあることが言へるならばその本は書かれなくてよかつた筈である。

併しそれを讀んだものの精神がその爲にする多彩な經驗は讀んだものの分け前であつてそれに就て語るのは自由である。所がそれでさへも「有愁日記」のやうな本の場合はその自由を行使してその文章の魅力、その柔軟と精緻、的確と闊達を經驗したことの第一に擧げずにゐるのは難しい。これは音樂と言葉が二つの外見上は全く違つたものでありながら音樂を聞くのに似てゐて一曲の音樂に就て言へる最高のことは結局はそれが音樂であるといふことに盡きる。「有愁日記」にあるものは歴史であると言つた。それは歴史であるから歴史そのものといふ一つの存在、又ユダから第一次世界大戰後のヨオロッパに、又ルイ十四世から武者小路實篤に、又中原中也に、マラルメに、又作者自身の過去に及び、そこにあるものは呻きであつて悦樂でもあり、多彩は遂には一つの蕭條たる流れになり、そしてその岸に立つた人間が覺えるのは悲哀でも陶醉でもなくてただ生きる意欲である。歴史は我々に何

も教へない。併し我々も生きた人間であることは自覺させて我々は過去のどういふ人物に倣ひたいと思つたりする代りにその人物にも人間の宿命を見る。「有愁日記」を讀むと古人が史書に親んだ態度が歴史に對して人間が取れる唯一のものであるのを感じる。それは生きてゐる味を嚙み締める爲だつた。ここに一人の古人が今日に生きてゐる。

## 古典（三月）

白洲正子氏の「古典の細道」（新潮選書）を最近讀んだ。その古典といふのは日本の古典のことでこの題からすれば古典の落ち穗拾ひといふ意味にも取れるが、それよりももつともとまで遡つて古典といふのが一般に何を指すかを考へるのがこの本に書いてあることの性格を知る手掛りになる。この言葉を字引で引くと古くからある本、又それが今日まで傳つたものといふことになり、それはその通りで構はなくてもその受け取り方で誤解の餘地も生じ、さうした誤解が今日では殆どこの言葉に付きものになつてゐると見られないこともない。もし古典が古くからあつて今に傳つた本ならばそれが傳つたのは讀むに堪へて讀み續けられた爲であり、それならば古典は傑作、或は傑作とか名作とかいふのが今日では濫用されて意味をなさなくなつたのならば要するに古典は優れた本を指す。從つて愛讀出來るといふことでもあつてそれ以外の印象を我々がこの言葉から受けるならばそれは凡て誤解であると斷じて差し支へない。

「古典の細道」の作者は日本で書かれた幾册かの本を愛讀し、或はさういふ本の中から幾册かを選んでその成立に與つてゐると見られる場所を實地に蹈査した。そのことに既にこの本の內容のみならずその內容が我々の思ひを誘つて行くその行く先にあることの特徵があつて少しでも古くからある本でその現場とも言ふべきものを訪ねることが望めるのは數へる程しかない。或は日本以外にはなくてギリシヤ、ロオマの遺跡は今日の世界の中で學者に丹念に發掘され、時には復原された文字通りの遺跡、廢墟であり、洛陽や長安が我々の精神の世界でどれだけ大きな場所を占めてゐてもその洛陽も長安も今日の世界にはもうない。確かにワイルドがどこかで言つてゐるやうにホメロスの詩では城壁に圍まれたトロヤの町が如何に鮮明な印象を伴つてそこにあつても今日その町で曾てはあつた場所まで行けばただ乾いた草原が擴つてゐるだけである。それが日本ではさうではない。

白洲氏が記紀萬葉の世界を求めて大和に、伊勢に、又河內に行けばそこにその世界が現にあり、後水尾上皇の造營に係る修學院離宮はそのままの形で殘つてゐて上皇の、又東福門院の眼に觸れた山水に圍まれて我々も立つことが出來る。勿論そこに行くことでさういふ昔の人達とともにある思ひをするには、又熊野灘を眺めて平維盛を、或は西國巡禮に出て花山院を偲ぶにはその各時代に書かれたものに先づ精通し、そのやうに精通するまでにそれを愛讀しなければならない。併しその情熱と理解がなくてその時代にもあつた場所まで行つて見る氣を起すものではなくて日本でならば廢墟や荒地に變つたのではないその場所を自分の眼で見て確めることが出來る。それはそのまま過去の世界に行き、それが現に自分が生きてゐる世界でもあることを知ることでもあつて白洲氏の本を讀んで何よりもこのこととそれを描き出す氏の文章に壓倒された。さういふ國といふものは今日の世界に日本の他にな

いが、それを動かせない現實に仕立てて見せてくれたのは白洲氏である。

曾て或る外國の女の人と話をしてゐて鎌倉の山奥の道端に小さな木の祠が建つてゐるのを見てここに古代のギリシヤがあると思つたとその人が言つたことがあつた。白洲氏の本で語られてゐるのはそれよりも遙かに絢爛な發見であつて、ただそれが餘りにも穩かにである爲に發見だと氣づくまでに時間が掛る。

## 文明（四月）

青蛙房といふのはいい本を出してゐるのみならず嚴選して良書しか出してゐないといふことだけでも今の時代に注目すべき出版社であつて故久保田万太郎氏が激賞した岸井良衞氏編の「五街道細見」を始め何册か現に大事に持つてゐるが、その中でも殊に愛讀してゐるものに菊池貴一郎の「江戸府內繪本風俗往來」がある。正確にはこれは明治末に出た古書の覆刻で又それをするのに充分に價する豐かな內容の本である。

菊池貴一郎といふのがどういふ人だつたか今は既に調べる術もないらしい。兎に角これは天保以後、明治に至るまでの江戸の生活を克明に覺えてゐた人、從つて必ずそれを刻々に味つて來た人でなければならなくて明治三十年代になつてその記憶を歳時記風に書いたのがこの本である。その出版を企てた功德を讃へて書店の名を擧げると、これは最初に明治三十八年に東陽堂といふ所から出たのを昭和

四十年に至つて青蛙房が覆刻して青蛙選書に加へた。それが大きな本で當時の插し繪もそのままあり、これに一月、二月と順を追つて江戸の風俗に就て書いてあることを讀んで行くうちに氣が付くのはこれが過去に就て懷古的に語つたものではなくて或る集團の生活の記錄であることであつて、從つてここにある過去は現在でもあり、人間の生活を語ることでこの本が時代を超えてゐることも明かになる。又それ故に天保以降の江戸後期といふ一時代の性格も否應なしに讀むものの頭に刻み付けられて、それは人間の生活があればそれがその時代を彩らずにゐないからである。

この本が歳時記の形を取つてゐて大體の所は各種の年中行事のことを書きながらそれがそのまま江戸の生活の記錄になつてゐることが注目に價し、又この本の價値をなしてゐる。我々の生活がもし生活と呼べるものならばこれは繰り返しであり、この性格が生活の基本をなすものであることを我々の生命に卽して我々に受け入れさせ、納得させる爲に季節の變化とともに年中行事がある。端的に言へば門松を虛禮と見るやうな社會に生活はないといふことになる。所が江戸時代には門松のみならず加賀鳶の出初め式も端午の節句も神田明神の祭禮も酉の市も煤拂ひもあつて、これは何度も讀み返した項目のうちの僅かな一部を目次から拾つたに過ぎない。又それが生活の一部をなし、そこに根を降し、寧ろそこから芽を吹いたものである證據にその行事に伴つて必ずその月々に生活の上で見られる變化が記してあり、例へば三月の項には雛祭のことを書いた後で「御得意へ日々來る魚屋は榮螺・蛤・丼わかさぎといふ小魚の串にさして燒たるは上巳當日の必要なる品にて大繁昌なるよりサゞイや〳〵、蛤や〳〵の賣聲市中いづれの所にても聞えざるはなし」といふやうなことが續く。三月、上巳の節句には、「町家一般に自家住居の向うなる三軒の家と兩の左右隣地所長屋內へ豆煎り取遣りあり家主地主



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com